

英文論文の和文要旨

林 辰弥¹・大野正夫¹：北大西洋亜寒帯域の上部鮮新統—下部更新統堆積物の珪藻：1. *Thalassiothrix antarctica*

Thalassiothrix antarctica は現在の南極大陸周辺の海域に棲息し、*T. longissima* は北半球の寒冷水域を好む海生珪藻である。この両種の対照的な棲息分布は、化石記録においても同様であると考えられてきた。しかし、本研究によって北大西洋亜寒帯域の上部鮮新統—下部更新統堆積物を調査した結果、*T. longissima* は見つからず、代わりに *T. antarctica* が多産することが分かった。調査した *T. antarctica* は形態の異極性を示す：頭部は、2つの棘と胞紋域の終わりに唇状突起を持つ；足部は、棘を持たず無紋域の末端に唇状突起を持つ。また、中腹部には、*T. antarctica* の特徴である、ねじれやS字状に湾曲した構造を持つ。鮮新世の後半から更新世の前半にかけては、北半球高緯度域の大陸氷床が本格的に成長し、氷期—間氷期サイクルが開始した移行期である。それに伴う海洋環境の変化によって、*T. antarctica* は北半球から姿を消したのかもしれない。

¹ 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 九州大学・比較社会文化研究院・地球変動講座)

田中宏之¹・南雲 保²：兜岩層（鮮新統）から見出された新種 *Tertiarius kabutoiwaensis* sp. nov., *T. minimus* sp. nov.

群馬・長野県境に分布する兜岩層（鮮新統）から *Tertiarius kabutoiwaensis* sp. nov. 及び *T. minimus* sp. nov. を記載し、日本の本属に所属する分類群を総括した。*T. kabutoiwaensis* sp. nov. は殻径 6–13 μm で殻面はほぼ平ら。殻中心から放射状に1列の点紋列が配列し（大形の殻では殻縁で僅か束線状に、小形の殻では点紋が散在的になることがある）、点紋列の密度は殻縁で 5–8 本/10 μm、点紋列中の点紋密度は約 16 個/10 μm である。この点紋列は殻面で終了し、より小さい胞紋列が殻面/殻套境界から殻套へ続く。殻面/殻套境界はゆるいカーブ状である。殻縁部には黒線が 5–6 本/10 μm の密度で観察され、黒線間の小胞紋列は 8–12 本であった。*T. minimus* sp. nov. は殻径 3.5–7 μm で殻面はほぼ平ら。殻中心からほぼ放射状又は散在的に点紋が配列する。この点紋列は殻面中心部で終了し、縁部～殻面/殻套境界は殻套からの細かい胞紋列が伸長している。殻縁部には黒線が 3–6 本観察される。

走査電子顕微鏡による観察では、光学顕微鏡で観察された殻縁の黒線は両種とも殻内側に所在する肋である。殻面の中心近くに1個（付随孔 2–3 個）、殻套ではすべての肋に有基突起（付随孔 2 個）が所在する。唇状突起は1個で、殻套有基突起が所在する肋に横向きに所在するが、稀に肋の基部に所在する場合もある。日本において唇状突起が殻套有基突起の所在する肋に横向きに存在する種は、他に *Tertiarius satsumaensis* (H.Tanaka & Houk) Nakov *et al.* (鹿児島県、郡山層)、*T. oitaensis* (H.Tanaka) H.Tanaka & Nagumo comb. nov. (大分県、尾本層) が見出されており、大分県に分布する尾本層から見出された *Cyclotella notata* Loseva と同定された分類群も *Tertiarius* と同様な唇状突起所在の特徴を持つ。一方 *Tertiarius agunensis* H.Tanaka (沖縄県、筆ん崎層。田中 2014) は唇状突起が長胞中に所在するが肋に所在しないので、更なる検討が必要であろう。

¹ 〒371-0823 群馬県前橋市川曲町 57-3 前橋珪藻研究所、² 〒947-0041 新潟県小千谷市小栗田 719-3 越後自然誌研究所)

植松幸希^{1,2}・青木 茂¹・岡本 研¹・日野明德^{1,3}：東京湾の潮間帯における底生珪藻相

東京湾の潮間帯における底生珪藻相を明らかにするため、2010年5月の干潮時に湾内15か所の干潟と海岸において底質を採取して調査を行った。調査地の塩分は10.6から30.5だった。最も中央粒径値の高かった地点では珪藻が観察されなかったが、他の地点では9～33種が観察され、全部で88種が出現した。各地点で細胞数が10%以上を占める優占種は、主に *Navicula* 属と *Amphora* 属だった。最も多くの地点で出現したのは *Navicula gregaria* で、次に *Haslea feriarum* と *Fallacia cf. teneroides* だった。世界各地で報告される汎世界種が東京湾でも優占したことから、干潟の底生珪藻群集には、潮汐に伴う水温や塩分の急激な変化や乾燥といった干潟特有の環境要因が影響していると示唆された。

¹ 〒113-8657 東京大学大学院農学生命科学研究科 東京都文京区弥生 1-1-1、² 〒424-8633 静岡県静岡市清水区折戸 5-7-1 水産研究・教育機構 国際水産資源研究所、³ 〒162-0801 東京都新宿区山吹町 347-7F 海洋生物環境研究所)